

共に生きる... WITH LIFE

2021
ウィズライフ
第53号

テーマ

コロナ禍の人々を支える看護と介護



私たちの「願い」

私たちは、公益に資する法人として、

- 「高齢者も障がいのある人も社会で共に暮らし、共に生きることがノーマルである」というノーマライゼーションの理念に基づき、
- 高齢者や障がい者が安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備・向上を通して、
- すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与することを目的に取り組んでおります。

私たちのこの「願い」のため

尚一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう

心からお願い申し上げます。

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

理事長 土屋 公三

WITH LIFE 第53号 目次

特集 コロナ禍の人々を支える看護と介護

4 看護 コロナ下の現状と課題

公益社団法人 北海道看護協会

8 介護 コロナ下の現状と課題

一般社団法人 北海道介護福祉士会

12 提言 新型コロナ禍から考える偏見と差別の根源

北星学園大学名誉教授 忍 博次

14 明るいフクシ探検記 「しくみ」プロジェクト

伊藤千織

16 小中学生による「安全・快適アイデア」コンテスト

18 福祉住宅建築助成実例集『ふれあい』

19 「ノーマライゼーション住宅財団」活動紹介

2021年4月1日発行

発行人／土屋公三

発行所／公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団◎

〒060-0042 札幌市中央区大通西16丁目2-3ループ16 9F

TEL 011-613-7551 FAX 011-612-8431

URL <http://normalize.or.jp/>

【制作スタッフ】 ●編集協力／株式会社日本商工振興会

●編集総括／奥野 彰

●取材・文／大藤紀美枝

●写真／酒井伸一

●レイアウト／高部友恵

●表紙イラスト／佐藤正人

●題字／須田照生

【印刷】株式会社須田製版

我らサポーター①

まきの
牧野 准子さん (62)

有限会社環工房代表取締役
一般社団法人日本ユニバーサルマナー協会講師
公益財団法人ノーマライゼーション住宅財団理事



車いすユーザー目線でリフォームした自宅で、バリアフリーについて語る牧野さん。著書やYouTube動画に関することは、「牧野准子」で検索を

車いすユーザーの建築士として講演を行い、
研修の講師を務める牧野准子さんは言う。

「優れたユニバーサルデザインはあっても、
完璧なバリアフリーはありません。」

それを埋めてくれるのが心のバリアフリーです」

17年前、子育てをしながら仕事にも全力投球。

エネルギーがそのものの牧野さんを

脊髄の進行性難病が襲った。

両足にまひが生じ、できないことが増え、

意気消沈の日々が続いたが、

手だけで運転できる車で遠くまでドライブし

小さな自信を得たことで、目の前が開けた。

「できなくなったことを悔やむより、

できることをしない方が残念と

思えるようになりました」

コロナ禍で外出自粛の間に

著書を複数出版し、YouTubeにも挑戦。

「出会い、気づき、理解を深め、

リラックスして共生を」と訴える。

写真／酒井伸一
取材・文／大藤紀美枝



HKワークス・牧野准子(共著)
『北海道バリアフリー観光ガイド』
(北海道新聞社2020年刊)

コロナ禍の人々を支える看護と介護

新型コロナウイルスの感染拡大は予断を許さず、医療や介護の現場では緊迫した状況が続いています。1月中旬、北海道看護協会と北海道介護福祉士会を訪ね、看護、介護従事者の奮闘と苦悩、求められる支援について伺いました。

取材・文／大藤紀美枝

看護

コロナ下の現状と課題

公益社団法人 北海道看護協会

看護の力を存分に発揮するには、心が通い合う環境づくりが肝要です。

高齢者のコロナ罹患で入院患者が増加

新型コロナウイルス感染症の感染拡大で、世界が一変。戦々恐々の状態が1年以上も続く中、医療関係者が激務にさらされているのは周知のとおりです。

患者に最も近い存在である看護職の奮闘ぶりを伺うため、北海道看護協会を訪ねたのは、1月19日のこと。まず、コ

ナ下での医療現場の近況から伺いました。

「今年に入り、ご高齢で日常生活に介助が必要であったり、認知症を持っておられる方で新型コロナウイルスに感染して入院される方が多くなっているとの報告を受けています。」

急性期の病院において、新型コロナウイルスに感染した患者さんで介護を要する方を看つつ、患者さんお一人お一人の身体の異常を観察し、治療に貢献

することになり、看護師の業務がますます増えています」と上田順子会長。

元々、感染症の病棟を備える病院は少なく、一般病棟を閉鎖あるいは縮小し、各部署から看護師を集めて新型コロナウイルス患者に対応しているのとこの。看護師は担当する診療科以外の看護ケアを行うことなるため、入院患者の病棟移動も看護師の再配置も容易ではありません。

また、新型コロナウイルス病棟への応援のため、一般病棟が人員不足になるといった問題も生じます。加えて、院内で新たな感染が発生すると、濃厚接触者となった看護師は勤務を休まなければなりません。

「新型コロナウイルスの患者さんに関する医療体制がクローズアップされていますが、一般の患者さんへの医療体制も困難をきたしており、看護師は非常に厳しい状況の中で仕事をし

ています」と上田会長は窮状を訴えます。

看護師派遣に見る助け合い精神

2020年12月、大規模なクラスターが発生した旭川市に自衛隊の看護師らが派遣されたのは記憶に新しいところ。こうした深刻な医療スナップ不足に対し、北海道の医療現場では、どのように対



公益社団法人 北海道看護協会
会長 上田 順子 さん



北海道看護協会会館の会議室にて感染予防に留意し話を伺う

処しているのでしょうか。
聞けば、昨年6月に、「北海道COVID（コビッド）19支援事業」が立ち上がり、北海道看護協会が支援看護師の派遣調整を担っているそう。

これは、医療機関や施設において、職員が新型コロナウイルスに感染するなどして看護職員が不足した場合、北海道に申請すると、同協会に連絡が入り、支援可能な医療機関から看護

師が派遣されるといふもの。事業開始とともに、「うちは、コロナ感染症の医療スタッフが出していないので、応援できません」と、支援する側に登録した医療機関が数件あり、同協会では、支援要請先と速やかにつながりました。が、一層の感染拡大により、支援に手を挙げる医療機関が減ったそう。全国的な支援の輪としては、全国知事会から支援看護師を派遣しており、2020年は13県から20人の看護師が道内各所に派遣され看護ケアに尽力。また、日本看護協会の都道府県外看護職員の応援派遣調整により、東京都看護協会と岩手県看護協会から計4人の看護師が12月から1月にかけて、旭川市内の病院に派遣されました。「年末年始は職員の配置が手薄になるときでもあり、とても助かったことと思います」と上田会長は、支援看護師の方々をねぎらいます。

このように全国的な助け合いが、さまざまな形で行われていますが、派遣事業を実施するには、協定を結ばなければなりません。また、派遣された看護師は初めての環境で新型コロナウイルス患者の看護ケアに当たるわけですから、オリエンテーションやメンタル面を含むこまやかなフォローが欠かせません。看護師派遣の取り組みをとおして、医療がいかに慎重を期し、嚴重でなければならぬかがわかります。

道内4万3383人の使命感とパワーを結集

病気のときは病院、看護してくれるのは看護師との通念がありますが、コロナ下にあつて、病氣と保健所、保健師との関連を理解する人がぐんと増えたと言われます。

「そもそも看護職とは、保健師、助産師、看護師、准看護師の総称です。保健師、助産師、看護師、准看護師、いずれかの免許を持っている人の道内総数は約8万6千人。そのうちの約半数が当協会に入会しています。

2020年12月末現在、当協会の会員数は4万3383人。内訳は保健師1144人、助産師1282人、看護師3万8597人、准看護師2360人です。看護師免許と助産師免許というようにダブルで、あるいはトリプルで免許を

持っている方もいらっしゃいますが、メインとなる仕事で登録されています」と荒木美枝専務理事。

同協会は、看護職能団体として教育研修に基づく看護の質向上、看護職が働き続けられる職場づくりの推進、地域ケアサービスの充実と道民の健康および増進に寄与することを使命とし、本部と22支部体制で活動を行っています。

ちなみに看護師や准看護師の活躍の場は、病院や診療所だけではありません。高齢者介護施設や訪問看護ステーション、保健所、健診・検診センター、企業など、多岐にわたります。

また、助産師は病院や診療所をはじめ、助産院、市区町村役所、教育機関などで活躍。保健師は保健所をはじめ、保健センター、市区町村役所、訪問看護ステーション、学校などで活躍しています。

看護職の免許と経験を眠らせないで役立てる

コロナ下で看護スタッフ不足が一層深刻化する中、北海道看護協会が1993年から続けている看護職の就業支援

医療従事者への最大の支援は、各自が感染予防に努め感染しないこと。

事業が注目を集めています。

同館内にある「ナースセンター」を担当する佐々木衿子常務理事によると、看護師免許を持っていて未就業の人に向けて、インターネットや会報などで「今こそ再就業を」と呼びかけたところ、問い合わせが多々あったそう。

「新型コロナウイルス関係だけでも、今日までに120人ぐらいの方が就業して下さっています。『現場を離れて少し時間が経っているけれど、自分で役に立つことがあれば』と、多くの方が手を挙げて下さったことに、感謝しています」と佐々木常務理事は言葉をかみしめ語ります。

離職後、時間が経ってれば、ただちに看護の最前線に加わるのは難しいため、今回、手を挙げて就業した方々は、「24時間電話相談」「軽症者宿泊療養施設の3交替勤務」「濃厚接触者に対する健康フォローアップ」などの取り組み

に貢献しているそう。

なお、同ナースセンターでは、同協会の会員・非会員を問わず未就業看護師の教育・再就職支援を行っています。

感謝する一方で 偏見、差別も

厳しい状況下で奮闘する看護職の方々に対し、「感謝の念に堪えない」との声が挙がっています。その一方で、看護職員やその家族に対し、心無い言葉を投げ付けたり、差別的な態度をとる人がいるのも事実です。

日本看護協会が2020年9月に実施した「看護職員の新型コロナウイルス感染症対応に関する実態調査」中、「看護職員への差別・偏見の有無」への問いに20・5%の看護職員が「あった」と答えています。北海道看護協会にも、各所、各人から不当な差別や偏見を経験した報告が上がってきて

います。

「看護師として勤務する病院でコロナ感染者が出たが、自分も家族も感染していないのに、子どもが保育園の入園を拒否された」「コロナ病棟ではない病棟に勤務する看護師が、『お前らが患者にうつしたんだろ』と言われた」「軽症者宿泊療養施設で就業している看護師が、勤務を終えタクシーに乗車しようとしたら拒否された」

いずれも、耳を疑うような事例です。こうした状況を改善すべく、医療機関や関係団体は差別、偏見、誹謗は慎むよう各所で訴え、さまざまな媒体でコメントを発信しています。

メンタルヘルスにも配慮し、病院長が「お悩み相談室」を開設したり、各自治体が開設している「心の相談室」を紹介したり、相談窓口を施設内に設置し、産業医や臨床心理士を配しているところもあるそうです。



北海道看護協会会館の2階ホールにて。左から山本常務理事、上田会長、佐々木常務理事、荒木専務理事

保健師の山本純子常務理事は、かつて多くの人が罹患した結核を例に挙げ、新型コロナウイルス感染症に伴う差別や偏見の事由を次のように考察します。

「結核は今日、早期に発見するための検査や治療薬があり、指定された機関で適切な医療を受けることができます。したがって、早期に発見して治療を行えば治る病気となり、重症化して亡くなることがほぼなくなってきました。」

新型コロナウイルスは、ワクチンが開発されたばかりで、治療法も確立していないため、住民の方々の不安が募り、差別や偏見を生んでいると思われる。ワクチンが行き渡り、治療法が確立したら状況は変わるのではないのでしょうか」

そして、今できることとして、「感染予防などの正しい知識を普及啓発し、住民相互の思いやりを醸成していくこと」を挙げます。

「看護ケアには「密」が必要

人を思いやるとは、どういうことなのか。上田会長は、「わかり合うことから始まる」と言います。

「新型コロナウイルスは、看護師だつて怖いんです。感染病棟で、毎日、看護ケアができるのは、息ができなくて苦しい、助けてほしいという患者さんの心の叫びがわかるからなんです。」

医師や看護師の言葉に耳を傾け闘病して下さっている患者さんに対し、自分が持っている専門性をすべて差し出して、一日でも早くよくなるよう手助けしたい。患者さんと心を通わせ、回復に向けてのプロセスを支えるのが看護師の役割であり、看護ケアの醍醐味でもあるんです」

心が通う人間関係は、じかに触れ合うことで築かれるもの。看護師は患者と目を合わせ、手を添え、体に触れ、表情から心理状態や体の具合を読み取って、看護ケアを行います。しかし、感染予防のため密を避けなければならぬ状況にあつて、「最も大事なこと」が思うようにできません。

「触れ合い、語らつて、できる限り患者さんのそばにいてさし上げたいのに、滞在時間は何分以内といったように制限されてしまうのが歯がゆく、現場の看護師はやり切れない思いをしていると思います」と上田会長は代弁します。

ナイチンゲールに学び 感染症と向き合う

医療従事者の負担が増し、ストレスが蓄積しているのは明らかです。一般市民にできる支援はあるのでしょうか。当事者に尋ねると、異口同音にこう答えます。

「一般市民の皆さまからの医療従事者に対する最大のご支援は、ご自身が感染しないことです」

そして、皆さん、厳しい状況の中にも希望の種を見いだしています。その一つが、在宅ケアの広がりとともに、訪問看護ステーションで就業する看護師の認知度が高まったこと。

「地域包括ケアシステムにおいても、看護師は重要な役割を担っています。在宅ケアの伸展とともに責任も重くなるでしょうが、地位向上のチャンスと捉え、責務を果たしていくてもらいたいです」と上田会長はエールを送ります。

さて、2020年は近代看護を築いたナイチンゲール生誕200年とあつて、看護関係団体は記念イベントを企画しましたが、新型コロナウイルスの影響で変更を余儀なくされました。

しかし、看護職の皆さんは、

生誕祭と感染症の流行に不思議なめぐり合わせを感じています。というのも、ナイチンゲールは感染症と闘い・向き合うことで、幾多の功績を残し、手洗い・換気・ソーシャルディスタンスなど、私たちが心して行っている感染予防は、ナイチンゲールが最初に呼びかけ、広まったことなのだそうです。

上田会長は、このことが、「改めて看護の原点、本質について考える機会となった」と言います。そして、「地域包括ケアシステムの時代となった今、

対象となる方を支えお守りするには、ナイチンゲールのように幅広い知識と実行力を持ち、さまざまな領域とつながりを強めていかなければなりません」と力を込めて語ります。

取材を終えて
今後、新型コロナウイルス感染症対策の決め手となるワクチンの接種が円滑に進めば、状況は大きく変わることでしよう。今回お伺いした多くのご苦労や連携が教訓となり、課題が解決されることを願ってやみません。

公益社団法人 北海道看護協会

札幌市白石区本通17丁目北3-24
TEL:011-863-6731 FAX:011-863-3204
URL: <http://www.hkna.or.jp/>

1947年、日本助産婦看護婦保健婦協会北海道支部結成を機に誕生した職能団体。保健師・助産師・看護師・准看護師が自主的に加入、運営している。本部(札幌)と道内22支部からなり、専門職としてのスキルアップ支援、働く環境の改善、地域ケアサービスの充実に努めている。

北海道看護協会「ナースセンター」

札幌市白石区本通17丁目北3-24
TEL:011-863-6794 FAX:011-866-2244
URL: <http://www.hokkaido-nurse.com/>

厚生労働大臣の認可を得て、北海道から委託されて開設している看護職員のための「無料職業紹介所」。本所(札幌)のほか、道内5カ所(函館・旭川・帯広・釧路・北見)の支所で就業等に関する相談を受け、看護職の仕事探し・人材探しをサポートしている。復職支援のための研修会(集合研修・施設実習)の充実を図り、オンラインによる復職支援講習も行っている。

介護 コロナ下の現状と課題

一般社団法人 北海道介護福祉士会

利用者さんを守り抜くために、 介護の質を上げ、仲間と連携を！

緊張感の中に見いだす
「やりがき」

新型コロナウイルス感染症の感染リスクを減らす方策の一つに、濃厚接触の回避があります。

感染すると重症化しやすいとされる高齢者や基礎疾患のある人と接するときは、とりわけ慎重を期さなくてはなりません。高齢者や障がいのある人の家族はもちろん、施設や事業所で介護に当たる人も感染予防に神経をすり減らしていることでしょう。

1月17日、札幌市内で、北

北海道介護福祉士の野口恵子

会長、渡邊千華子副会長、羽

山政弘事務局長に、道内の介

護の現場の状況と課題を伺い

ました。お三方は正副会長会

議を終えたばかり。コロナ禍

で、同会でもオンライン会議

が増えたそうですが、今回は

どうしても顔を合わせる必要

があったそう。野口会長は日

高町から、渡邊副会長は釧路

市からの参加です。なお、取

材時はソーシャルディスタンス

を保ち、写真撮影の際マスク

を外していただきました。

日高町内の社会福祉法人で

施設管理者、介護支援専門員

（ケアマネジャー）などを務める野口会長は、介護の現場の

現状を次のように語ります。

「施設や事業所では、かねて

よりノロ対策、インフルエンザ

対策として、徹底して衛生管

理を行っています。そこに、さ

らに新型コロナウイルス感染防

止策をということで、一時間二

手間どころではない作業が加

わりました」

介護職員は、歯磨き、食事、

入浴、排せつの介助などで、利

用者と濃厚接触し、唾液や排

せつ物に触れる可能性もあり

ます。作業時は手袋、エプロン、

マスクが必須です。コロナ下で

は施設内の通常の清掃や洗濯

に加え、ためにアルコール消毒

をしなければなりません。

コロナ下で業務が増えたか

らと比べてスタッフの増員は

難しく、それどころか離職す

る人も出、就業環境はますます

厳しくなっているようです。

「新型コロナウイルスの流行で、介護

職の業務は確かに増えました。

だからと言って嘆くのではな

く、「二層やりがきを感じる」と

という声が上がっています。何と

しても利用者さんを守ってあ

げたいという気持ち、やり

がいに、みんなが頑張る

うというスタッフの連携が、各

自のモチベーションを支えてい

るんです」と野口会長は一言一

言、力を込めて語ります。

**全道10支部で構成
研修会・講習会を開催**

介護福祉士は国家資格で、

特別養護老人ホーム、医療施

設、障害者支援施設、グルー

プホーム、デイサービス、居

宅サービス事業所などで活躍

しています。

「介護福祉士の有資格者は道

内に9万5千人ぐらいいると

言われます。しかし、当会の

会員数は約770人。組織率



一般社団法人 北海道介護福祉士会
の 野口 恵子 会長

を上げることはもちろん大切ですが、どの地域においても質の高い介護サービスを提供するため、実践・研修・交流に力を注いでいます」と野口会長。

同会は、札幌市に事務局を置き、10支部（札幌・石狩・空知・網走・道北・十勝・釧根・後志・日胆・道南）で構成。「専門職として実践の中で自らの専門性と職業倫理を高め自己成長の継続を」と定期的に研修会や講習会を開催しているほか、介護福祉士の資格取得を目指す人に学習機会を提供するなど、支援も行っています。専門性を生かした被災地支援活動にも取り組み、災害ボランティアや感染症対策に特化した研修を行っているところも注目すべきところではあります。

コロナ禍で、2020年以来、密を避けるなどの理由で変更や延期、中止を余儀なくされた研修もありますが、オンラインを活用したり、感染予防対策を徹底して開催している研修もあります。

「感染リスクを避けるため2020年9月頃から一部研修会にオンラインを導入しています。北海道は広いので、例えば、稚内の会員が札幌で開

催される研修会に出席しようと思えば、往復に相当の時間と費用を要します。

オンラインであれば、自宅にいながら受講できるわけですから、感染予防だけでなく、移動しないで済むメリットも大きい」と羽山事務局長。同会の研修会や講習会は、仕事を休まず出席可能な土日曜日に開催しており、自宅にいながらというのは、何にも増して大きな魅力と言えるでしょう。

支え合って 試練を乗り越える

介護の現場では、さまざまな工夫をして、新型コロナから利用者を守っています。

外部の人との接触を避けるため、施設利用者の面会制限



一般社団法人
北海道介護福祉士会
事務局長 羽山 政弘さん

を行っているのもその一つ。2020年4月の緊急事態宣言時以降、長期にわたる面会制限を行っているため、利用者と親族が会えない、あるいは会ってもわずかの間という日々が続いています。

じかに接することがままならない穴をどうやって埋めるのか。A施設ではLINEを使って、利用者の画像と近況を随時、親族に送信しています。B施設は、施設の行事の画像とコメントをウェブサイトにためにアップ。C施設では、施設の行事や利用者の写真を載せたお便りやビデオレターを作成して家族に届けています。

また、D施設では面会制限中、Skypeを使ったオンライン面会を導入。事務室前にパソコンを設置して、届け物

などで施設を訪れた家族と居室の利用者をオンラインで結ぶもので、利用者の元へは職員が別のパソコンを持って行って対応します。

こうした取り組みの情報交換はとても有意義です。介護福祉士会では、機関紙「しおん」にタイムリーなお役立ち情報を掲載するなど、情報の発信・共有に力を注いでいます。

「当会の会員は、学校出たての20代の方もいれば、70代の大ベテランもいます。パソコン操作に不慣れな仲間がいれば、『今度の土曜日、うちで一緒にオンライン研修受けない!』と声をかけるなど、身近なところから連携の輪を広げていっています」と野口会長。

「自分ができることをして応援しよう」という考えは、会員各自に根づいており、家族が新型コロナウイルスに感染し、濃厚接触者のため自宅待機を余儀なくされた仲間へは、SNSを活用して励ましのメッセージを送信。クラスターが発生しているながら、感染予防用品が不足している介護施設へは、同会が中心となって参加者を募り、手づくりのフェイスシールドなどを届けたそう。

「後方支援ですけれど、明日は我が身。お互いさまと違って、多くの会員が協力してくれました」と野口会長は、感慨深げに語ります。

ネガティブな イメージの払拭を

介護職員の中には、介護福祉士、介護職員実務者研修（旧



会議室と在宅役員をオンラインで結んだ会議の一コマ
(北海道介護福祉士会提供)

介護福祉士は幸せを考え行動する人！ 思いやりと使命感を持ち献身的介護にいそしむ。

ホームヘルパー1級に該当)、
介護職員初任者研修(旧ホームヘルパー2級に該当)など
介護関係の有資格者だけでなく、
資格を持っていない人も
います。

有資格者でも各人、知識量
や技術力に差があり、経験も
異なります。スキルや経験値
にばらつきがある中で、いか
にして利用者各人にふさわし
い介護サービスを提供するか、
介護福祉士には介護サービ
スのマネジメント力も求められ

るのでそうです。

「介護福祉士は、ケアをする
にとどまらず、幸せについて
考え行動できる人でなくては
なりません」と野口会長は、
福祉の部分強調します。

そうした思いやりや使命感
を持っていくからこそ、長引
くコロナ下にあつて、献身的
な介護をし続けることができ
るのでしよう。

介護の現場を担う人たちが、
その専門性と使命感を全うす
るには、就業環境が整ってい

なければなりませんし、地位
や収入も確保されなければな
りません。しかし、現実には厳
しいものがあります。

「介護職は、キツイ・キタナイ・
キケンな3Kと言われるりし
ます。ネガティブな面を強調
した報道の影響もありますが、
私たち現場の人間が、『大変だ、
大変だ』と言いつづけたことに
も問題があると思います」と
野口会長。

長年、専門学校で介護福祉
士の養成に当たった渡邊副会
長によると、介護福祉士養成施
設の入学者は2014年ごろ
から減り始め、道内の養成施設
では募集人員の4割を切ってい
るところもあるそう。

志望者数減には、少子化も
影響しているでしょうが、高
齢化が進み介護を必要とする
人が増える中、介護福祉士を
目指す人が減っているのは大
問題です。

介護福祉士のみならず、介
護職に就く人を増やすには、



北海道介護福祉士会の機関紙「しおん」



役員の方々。左から酒井賢一副会長、打田仁美副会長、野口会長、渡邊副会長 (北海道介護福祉士会提供)

「どうしたらよいのでしょうか。」
このたびお会いしたお三方は、「介護職の魅力をもっとアピールすべき」と口をそろえます。そこで、介護の仕事を目指したきっかけ、仕事のやりがい、仕事をとおして学んだことを具体的に紹介するため、野口会長と渡邊副会長に、ご自身の経験を語っていただきました。

介護の仕事に就いて 価値観が変わりました

野口恵子会長

私の長男は自閉症でかなり強い行動障がいがあります。30年近く前、地元(旧門別町)には、障がい児の保育施設も療育センターもありませんでした。役場に行って「どうして障がい児保育をやらないんですか」と談判し続けました。頭から湯気が出ていたと思います。

福祉制度について知らなければ道は開けないと思い、学ぶ手だてとしてホームヘルプサービス講座を受講しました。その一方で、障がい児の親の会を立ち上げ、環境改善に取り組みました。

子育てをしながら、地域の社会福祉法人に勤め、実務経験を積んで介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員の資格を取得しました。

どんなにつらくても、子どものためなら頑張れるものです。介護サービスの利用者さんに対して同じ気持ちです。普段、寝つきの悪い人が今日はよく眠ってくれている…。私のおむつ交換のやり方が、よかったのかもしれない。シーツのヨレを直したのも、よかったのかもしれない…。自分なりの心遣いがよい結果を生んだときの喜びは格別で、「やりがい」を実感するときでもあります。

そうやって利用者さんお一人お一人を尊重してお世話をする中で、誰しも弱みを持つ

ているし、さまざまな苦勞をしているとわかり、価値観が大きく変わりました。かつて「世界一不幸だ」と嘆いていた私が、「これでいい」と思えるようになったんです。

介護職では倫理が重視され、自分自身の生き方が問われます。周囲と支え合って、誇りを持って歩んでいきたい。そのためにも一層スキルアップを自分なりに言い聞かせています。

人を思いやると 笑顔が返ってきます

渡邊千華子副会長

私に福祉の道を志すきっかけを与えてくれたのは、小学3年生で検査入院した際、隣のベッドにいた寝たきりのおばあさんです。



一般社団法人
北海道介護福祉士会
副会長 **渡邊 千華子**さん

付添婦さんがおばあさんのお世話をしている、おばあさんが口から発するのは、「おしっこ」と「うんこ」の二言だけ。会話はありませんでした。でも、私が退院する日、折り紙で作ったお花をおばあさんにあげたら、「ありがとうね」と言ってくれて、涙を流したんです。おばあさんの心に触れた気がして、こういうことができる仕事に就きたいと思いました。

介護現場で働いていたときに出会った、認知症の利用者さんも忘れられません。お世話をしながら私がつい愚痴をこぼすと、「貧乏暇なしなんて言うんでない。元氣でいるから多忙の幸せって言うんだよ」と諭してくれました。

利用者さんに「うるさい。あっちへ行け」と怒鳴られたこともあり。でも、そうした態度をとるには何か理由があるんです。誰からも愛情を注がれることがなく歩んでこられた方もいます。だとしたら、今、愛情をいっばい注いでお世話を…。その方の背景を知り理解しようとする、と、暴言にいら立つこともありません。荒々しかった利用者さんが、どんどん朗らかなになっていくのは、とても

うれしいものです。

取材を終えて

コロナ下で介護業界の人手不足等が一層深刻化していることを実感しました。業界だけでなく、いつかは介護を受けることになるであろう誰もが直面している問題ですから、多くの人が、まずは北海道介護福祉士会のウェブサイトなどから基本的な情報を得ていただくことが大事だと思います。

一般社団法人 北海道介護福祉士会

札幌市中央区北2条西7丁目1-10 かでる2.7 4階
TEL&FAX: 011-222-5200 (電話対応は月～金の13～17時)
E-mail: info@hokkaido-kaigo.jp URL: http://www.hokkaido-kaigo.jp/

公益社団法人日本介護福祉士会の北海道支部として1994年に設立。札幌市に事務局を置き、道内10支部で構成。北海道の福祉推進に参与することを目的に、介護福祉士の資質向上のための研修、介護福祉士の教育機関への協力、機関紙の発行および社会福祉に関する情報提供等を行っている。2020年12月末現在、会員は約770人。

新型コロナウイルス禍から考える

偏見と差別の根源

北星学園大学 名誉教授

忍おし

博次ひろつぐ



忍 博次(おし・ひろつぐ)

1930年、富良野市生まれ。国立身体障害者更生指導所勤務等を経て、北星学園大学、吉備国際大学、九州保健福祉大学大学院、名寄市立大学で社会福祉を研究・教育。北海道社会福祉協議会役員等を歴任。ノーマライゼーション住宅財団評議員。著書、研究論文多数。

感染症の病原は悪霊か

新型コロナウイルスは世界中で猛威をふるって衰えを見せない。中国の武漢で新しいタイプの呼吸器疾患をもたらすウイルスの危機を察知し、それ故に虚偽の報道で世を乱す恐れありと一医師が政府から罰せられたとき、だれがこのパンデミックを想像したであろうか。感染症は異種、新種の発症など、まだまだ未知の疾患なのである。

昔から人類は、感染症と戦ってきたと言われる。しかし、科学の目は、顕微鏡の発

明(16世紀後半)まで届かなかった。病気の感染は、微生物の介在や細菌の直接伝播など仮説的想像を語ることがあっても現象の影の姿は明らかにできなかった。流行病の拡大におののく人々は、病原の見えない不安と恐怖から悪霊の祟りや因果応報の報いなど、根拠のない言説に惑わされ感染者を差別したり、コミュニティから排除したりしたことがあったと言われている。

パンデミックの影響

数ある感染症のうちで、パ

ンデミックをもたらし、歴史的にも人々の記憶に残る感染症の惨禍といえ、14世紀のペストの流行、そして、100年前に世界各国の軍隊を悩ませたスペイン風邪であろうか。ペストは死亡率が高く、確証は難しいが14世紀欧州人口の30%にも及んだと言われている。その後も数度に渡って地球上を荒らしまわり、各国に犠牲を強いた。病原体も不明で流言飛語は乱れ飛んだであろうし、「死の影」を踏むペスト感染者に対し危険から身を守ろうとする非感染者がどんな態度をとったであろう。

ンデミックをもたらし、歴史的にも人々の記憶に残る感染症の惨禍といえ、14世紀のペストの流行、そして、100年前に世界各国の軍隊を悩ませたスペイン風邪であろうか。ペストは死亡率が高く、確証は難しいが14世紀欧州人口の30%にも及んだと言われている。その後も数度に渡って地球上を荒らしまわり、各国に犠牲を強いた。病原体も不明で流言飛語は乱れ飛んだであろうし、「死の影」を踏むペスト感染者に対し危険から身を守ろうとする非感染者がどんな態度をとったであろう。

感染者はさぞかし惨めであったことだろう。

ちなみに、ペスト菌は北里柴三郎氏によって1894年に発見された。感染は病原体を持つ野鼠と血を吸う蚤が人間に媒介して起こるといふ。スペイン風邪はスペインが病原の発症地ではない。この感冒状の感染症が猖獗を極めるようになった1918年は第1次世界大戦末期であった。参戦各国は情報統制を引き、情報の真偽は不確かであった。戦争参加国でないスペインの情報も重んじたため、インフル

エンザウイルスの俗称として

この名がつけられたというわけである。このウイルスはその後、何波にもわたって各国を襲い、しかも感染力(世界人口の25〜30%)、死亡率(25%)と共に高く、人々を震えあがらせた。このため戦争終結が早まったと言われている。

医療関係者への八つ当たりはやめよう

新聞やテレビの報道によれば、コロナウイルスに感染した患者の治療に当たっている医療従事者への偏見や差別も見られるという。感謝されて当

然なのに何故なのであろうか。

例えば、「感染症担当の看護師さんの子どもの保育所利用はお断りしたい」という差別は、感染症の危機を回避することを目論む短絡的行動と理解できないか。何故ならワクチンや治療の特効薬が開発されれば、こんな差別はなくなるからである。

それよりも、感染した患者に対する偏見や差別は深刻であろう。かつて、我が国はこのような患者に対する過酷な差別を行った事実がある。国家レベルで組織的強制的隔離政策を行ったハンセン病患者の隔離である。

ハンセン病患者への隔離政策

ハンセン病は、かつて、らい病と呼ばれた。この病気にかかると四肢の変形、知覚麻痺、顔面潰瘍などを生じ、恐れられ、差別を受けた。家族からも地域からも離れ、物乞いによってしか生きるすべがなかった。

明治政府は「らい予防に関する件」を設け強制隔離に着

手した。その後、国立療養所の設立による隔離、地方自治体を巻き込んだ「無らい県運動」を行い隔離を強化した。

戦後は「らい予防法」(1953年)によって隔離は継続されていく。この時、この病気が特効薬により治癒する病気になるっていた。この事実は新法成立に当たって隔離による予防政策を疑ってみるべきであった。しかし、多くの療養所入所者や隔離に疑問を持つ医師たちの隔離反対の声は無視されて、らい予防法は成立し、1996年のらい予防法廃止まで療養所への隔離は継続された。

自由を求め逃亡を企てる者は懲罰・監禁され、犯罪的とみなされると重監房へ送られた。また療養所内の結婚は断種が条件であった。患者を狩り出し、終生収容・隔離、子は産ませない(優生思想)は療養所処遇の根本思想であった。このような政府主導の強制隔離は人々にハンセン病への偏見・差別を助長し、家族への白眼視、社会参加の壁となって苦しめた。

らい予防法は廃止され、隔

離はなくなつたが、いまだ地域での自立生活は難しい。親類や親家族との絆は断たれ、子どもはいない。さらに偏見・差別は無くなつてはいない。調査で話を聞いたが、レストランやクリーニング店で差別的態度に接した経験を訴える姿は痛々しかった。

筆者の狭い経験でも、これまで感染症が治癒しても偏見や差別で苦しむ人々たちを見てきた。例えば、結核である。国民病といわれ無理がきかない身体は戦時において侮蔑された。ポリオは四肢のいづれかに麻痺が残る。1960年に北海道で大流行し、多くの幼児が犠牲になった。その頃は学校も就職もバリアに阻まれ、社会参加に苦労していた。そんな社会のバリア改善ができない、職場の環境の合理的配慮が進まない理由の一部に偏見・差別の存在があると思うのである。

障がい者に対する偏見と差別を考える

病者への偏見・差別は主に病気の原因と治療の状況をめ

ぐつて現れる。前述した看護師は、専門職としてウイルスに接しなければならぬ。その看護師と家庭で濃厚接触している子どもを周囲の人間が回避する行動は、差別であっても単なる自己利益に発する危機回避行動であつて、偏見に根ざしたことでないであろう。

ここで、障がい者と言われる人々たちに対する偏見・差別を捉えてみよう。そうすることで病者への偏見も洞察できるであろう。

一般に障がい者にどんな態度をとるであろうか、調査をしたことがある。

いろいろな社会関係、障がい者に対する好悪の意識を問うてみたところ、職業能力、容姿、社会関係に比較的否定的感情や信念を抱いていることが分かった。これらの刺激に対する反応は本来は個人差があるはずだが、障がい者の示す刺激に対する反応は比較的ステロタイプであった。つまり、職業能力への否定的態度は職業選択を狭める心のバリアになり、標準から離れた容姿への認識や社会関係に距離を置く感情は、日本文化の中

の社会的交流を回避するバリアとして働いていることがうかがわれる。

おわりに

コロナウイルスの感染を契機として病者に対する偏見や差別を考えてきた。日常の好悪や迷惑感の否定的価値の行きつく先は、コミュニティからの排除であり、抹殺である。ドイツのナチズムは精神病者を20万人以上もガス室に入れたというし、わが国の最近の事件では、神奈川県津久井やまゆり園で起きた重度障がい者19人を殺害、職員を含む26人に重軽傷を負わせた事件がある。動機は「重度障がい者は生きる価値がない」と断じる優生思想であるが、それに加えて生産力で人間の価値を凶る常識が見えてくる。アメリカのサンシテイ(高齢者の町)で出会った一人の高齢者のつぶやきを思いだす。「高齢になって能力が衰えると、この国はそこで住みづらくなるのですよ。分かる?」この人はラストベルト(不況の影響をもっとも受けている地区)に住んでいたと言っていた。

明るいフクシ

探検記

おしゃまします!

文・イラスト
伊藤千織



「しくみ」プロジェクト

実験 Case 01

◎ 札幌市民交流プラザ

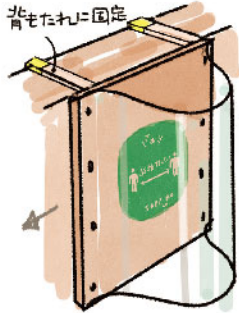
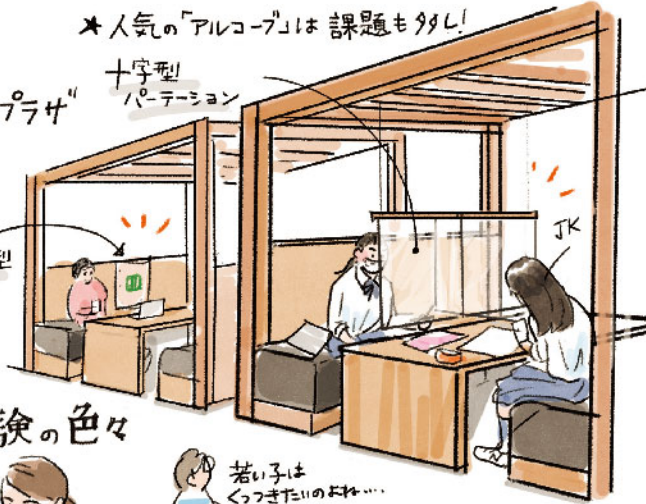
★人気の「アルコブ」は 課題もタタシ!

十字型
パーティション

「しつらえでディスタンス！」

不特定多数が利用する施設
既存の家具を活かして対策。

横方向型



★圧迫感の少ない
透明な曲面デザイン



しくみの 実験の色々



★2人掛けが自然に1人用になる
テーブル型パーティ

若い子は
くつぎたいの癖...
おバサン

利用者の安全のために
日々目くぼりしてます



TEAM
交流プラザ!

しくみ 番外編

音でディスタンス?!

★作曲家・畑中正人さん作曲の
「交差する音」は、不協和音の
2音が適切な距離感で
心地よく響くオリジナル作品。

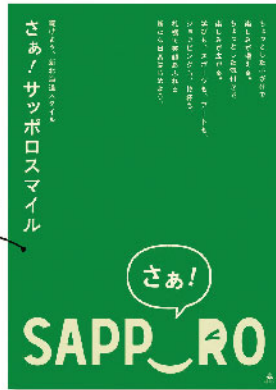


★グラフィックデザイナー
佐々木信さん



こんな
ヤザン!!

これも
デザイン
しました



「こんな時だからこそ
デザインを社会の役に
立てようよ!」



★イベントプロデューサーの
山岸正美さん

デザインを課題解決に
とかく見た目や新しさなどに目が行きやすい「デザイン」。しかし本来は、必要なところに必要な機能や使いやすさを与え、身の回りや社会の課題を創造的に解決するという役割がある。
折しも、札幌市の複合文化施設「札幌市民交流プラザ」が臨時休館から再開準備中。利用者である一般市民の安全をどう確保するかという空間づくりの課題解決に「しくみ」も参加。市の担当スタッフと話し合いを繰

「われわれデザイナーも何か社会の役に立てないだろうか?」という呼びかけに、札幌在住の有志4人が立ち上がったのが「しくみ」プロジェクトだ。かく言う筆者も、この状況にデザインの力を活かしたいと参加した一人。
一風変わったこの名前には、江戸時代の火消し「め組」と、コロナ時代の新しい仕組み作りへの思いにちなむ。

広がる感染状況に危機感の募る中、
「新しい生活様式」という耳新しい言葉が使われ始めた頃。
「新しい生活様式」という耳新しい言葉が使われ始めた頃。
「新しい生活様式」という耳新しい言葉が使われ始めた頃。

コロナとデザイン

ことの始まりは、全国に新型コロナウイルス緊急事態宣言が出された昨年5月に遡る。すでに第二波の北海道での感染者数増加が連日全国のニュースを騒がせ、「ソーシャルディスタンス」や「三密」

しくみプロジェクト

コロナ対策を、わかりやすく、楽しく、美しく

How to make ソーシャルディスタンス

デザインで
感染予防
対策

しくみ Case:02
@ コンベンションセンター
「グッズでディスタンス！」

今回は私も参加している
活動力をご紹介します!

※筆者
実はプロダクト&インテリア
デザイナー

強カ助っ人
活動力記録担当
フリーライター
佐藤優子さん



ディスタンス用トレー
荷物置き兼用
扉ボルトのこりサイクリック

ディレクターの
カジタシブさん

コーディネート&
やまこいこと
全般担当



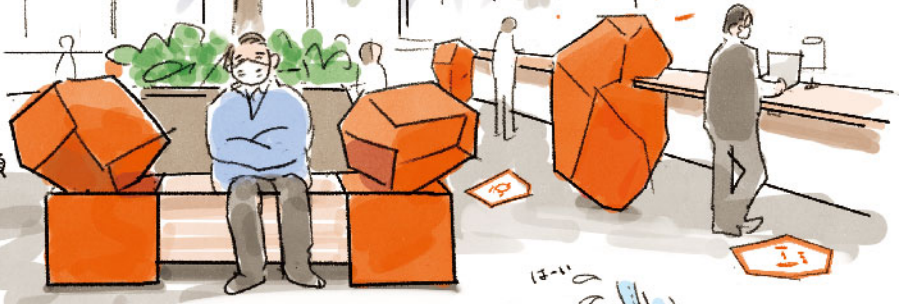
任せて
安心!

しくみ Case:03
@ 赤れんがテラス
アトリウムテラス

「オブジェでディスタンス！」

モチーフは
「岩」

ゆるぎない巨石の
力強さと安寧祈願
の鬼いを込めた
デザイン。



★コロナ以前は
観光客やビジネスマンも
立寄る人気スポット。
けっこう密でした。



ダメ押しの
床メッセージシート

To be Continued...

●「しくみ」プロジェクト <https://www.sikumi.org>

「広がるしくみ」
この取り組みから、「しくみ」の活動はさまざまな方向に展開。都心に屋内型公共スペースを持つ赤れんがテラス（札幌三井JPビルディング）からの依頼では、「最大限の感染予防」という課題に巨大なオブジェを配し、物理的・視覚的な感染防止策を試みた。また、市立札幌大通高校の高校生たちによる校内行事でのコロナ対策のサポート、オンラインのトークイベント「しくみTV」等々、点で始まった活動は、仲間を増やしつつ面的に広がりつつある。

忌むべき疫病との戦いの一方で、地域と人の繋がる新しい出会いが生まれていることは、思わぬ嬉しい副産物だ。「しくみ」の収束がまだ見えない今、この取り組みの試みは現在進行形で続いていく。

り返ししながら、施設内のフリースペースや図書館に数多く設置されたベンチへの対策や、より伝わる案内表示のグラフィックデザインなどを提案。言葉で禁止や規制するのではなく、利用者が直感的に認識でき、見た目に美しく、更にノウハウを広く共有できることを目指した。公共空間での感染予防にまだどこにも正解がない中、手探りの実証実験がスタートした。

第25回
**小中学生による
「安全・快適アイデア」
コンテスト**
入賞者発表

当財団では、毎年、小中学生を対象に「安全・快適アイデア」コンテストを実施しています。今回は道内21校（小学校8校、中学校13校）および個人から575作品の応募がありました。審査結果をお知らせいたします。
（記載の学校・学年は応募時現在）

審査委員長 講評

北海道デザイン協議会

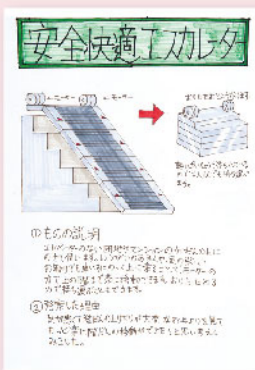
名誉会長 大阪 克彦

今回は、新型コロナウイルス感染予防に関係した作品が多数あり、子どもたちの関心の高さを実感しました。2次審査は、通常、全審査委員が同席して行いますが、コロナ禍の中、日時を調整し、2、3人に分かれる形で行いました。小学生の部・最優秀賞の「空気分解自動車」は、地球温暖化対策をテーマに、有害な空気を自動車に取り込んで動力にし、きれいな

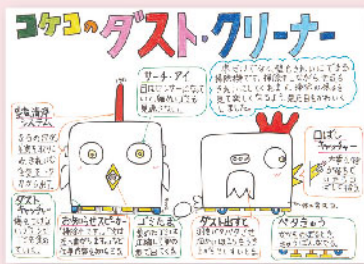
小学生の部

優秀賞 [2作品]

最優秀賞



「安全快適エスカレーター」
函館市立中央小学校6年
佐藤唯衣さん



「コケコのダスト・クリーナー」
釧路市立湖畔小学校4年
門間大明さん



「空気分解自動車」
函館市立中央小学校6年 猪狩壮二郎さん

中学生の部

優秀賞 [2作品]

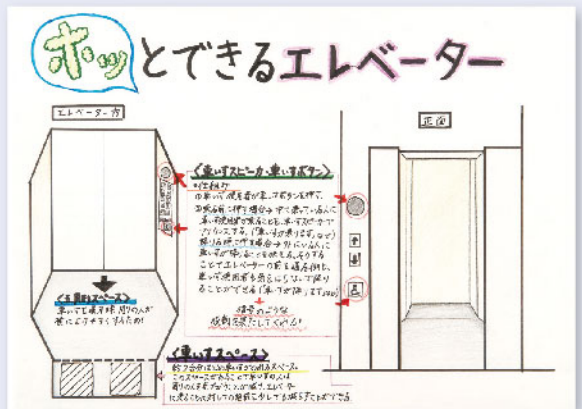
最優秀賞



「手助けスノーカー」
釧路町立富原中学校3年
濱屋静玖さん



「圧縮でゴミ袋なゴミ箱」
旭川市立東陽中学校3年
佐藤瑠泉さん



「ホッとできるエレベーター」
壮瞥町立壮瞥中学校3年 近江 雛さん



本コンテスト入賞作品は、例年、さっぽろ地下街で展示公開しています。(今回は1月9日～11日展示)

- 審査委員** (敬称略・順不同)
- 北海道科学大学 名誉教授 菊地 弘明
 - 伊藤千織デザイン事務所 代表 伊藤 千織
 - 有限会社環工房 代表取締役 牧野 准子
 - 北海道社会福祉協議会 事務局次長 高屋 正人
 - 北海道デザイン研究所 所長 佐藤 進
 - 北海道新聞社 くらし報道部 部次長 藤本 陽介

空気として車外に出すというアイデア。地球をモチーフにした車体もユニークですし、先を見すえた思考が頼もしい限りです。

中学生の部・最優秀賞の「ホッとできるエレベーター」は、車いすユーザーがエレベーターを利用する際、他の利用者に乗り降りを知らせたり、エレベーター内の形を工夫するアイデア。心のバリアフリーにも配慮した、やさしさあふれる作品です。

毎回、いろいろなアイデアが寄せられ感動しています。次回が一層、楽しみです。

優良賞 [3作品]

■佳作 [7作品]

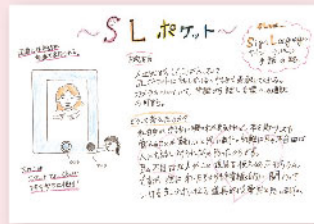
- 下川町立下川小学校3年 三浦かりん
- 江別市立野幌若葉小学校4年 紺野夢花
- 共和町立東陽小学校6年 池田大峨
- 下川町立下川小学校6年 三浦かな
- 函館市立中央小学校6年 澤山柊弥、平清水実緒、門間椿貴

■奨励賞 [10作品]

- 札幌市立新川中央小学校1年 木村謙仁
 - 伊達市立伊達西小学校2年 亀谷湖雪
 - 江別市立野幌若葉小学校4年 小泉唯花、田中楓彩
 - 札幌市立幌南小学校5年 大西優莉
 - 札幌市立手稲鉄北小学校5年 野村望柚郁
 - 共和町立東陽小学校6年 寺田小陽
 - 札幌市立上白石小学校6年 岩本彩花、松坂水舜
 - 函館市立中央小学校6年 石川実乃璃
- (敬称略・順不同)



「変身エア車いす」
北海道教育大学附属旭川小学校5年 大串雪花さん



「SLポケット」
札幌市立厚別通小学校4年 吉田桜彩さん



「ホログラムでがくしゅう」
小樽市立奥沢小学校2年 宮崎志道さん

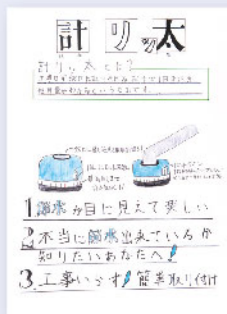
優良賞 [5作品]

■佳作 [11作品]

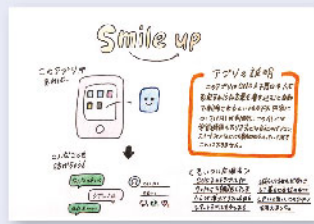
- 岩内町立岩内第一中学校2年 阿部希星
- 旭川市立東陽中学校3年 泉 桃果、井ノ口侑来、郷古綾菜、三栗彩実、山田弥佳
- 釧路町立富原中学校3年 阿部由姫菜、香川遥佳、千葉裕仁
- 洞爺湖町立虻田中学校3年 村瀬琉惺
- 札幌市立加内町立加内中学校3年 菅原悠斗

■奨励賞 [15作品]

- 旭川市立愛宕中学校1年 平澤萌梨
 - 音威子府村立音威子府中学校1年 北原凛々奈
 - 士別市立士別南中学校1年 小熊太誠
 - 幕別町立札内中学校1年 麓 ゆめ
 - 旭川市立愛宕中学校2年 谷 汐音
 - 岩内町立岩内第一中学校2年 齊藤彩羽
 - 岩内町立岩内第二中学校2年 尾崎紗々羽
 - 札幌市立平岡緑中学校2年 香川さくら
 - 富良野市立富良野西中学校2年 日向楓花
 - 市立札幌開成中等教育学校3年 伊藤隆太
 - 壮瞥町立壮瞥中学校3年 木村花繪
 - 千歳市立北進中学校3年 川畑佑真
 - 洞爺湖町立虻田中学校3年 佐々木海、佐藤さらら
 - 富良野市立富良野西中学校3年 荒井麻那香
- (敬称略・順不同)



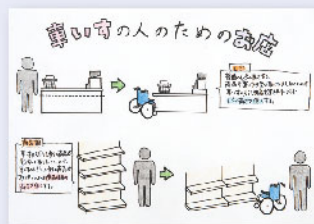
「計リッ太」
旭川市立東陽中学校3年 山田享介さん



「ありそうでなかった便利なアプリ」
旭川市立東陽中学校3年 丸谷美優さん



「Camera付き防犯ブザー」
旭川市立東陽中学校3年 狩集結衣さん



「車いすの人のためのお店」
壮瞥町立壮瞥中学校3年 久慈亜弥さん



「ていでいーべあ魔鈴」
釧路町立富原中学校3年 濱屋愛莉さん

※ここに掲載のアイデアの無断使用を禁じます。お問い合わせは当発行所(P2)までお願いします。

ヒントは福祉施設の感染対策現場に

ウィズコロナ時代の 安全安心な福祉住宅

福祉住宅建築助成実例集「ふれあい」担当 西村裕広

福祉施設・障がい者施設におけるコロナウイルス感染対策は、実は従来からの日常的感染対策と基本的に変わりはないという。ウィズコロナ・アフターコロナ時代を見据えたノウハウのヒントがそこにありそうだ。今後『ふれあい』発行を通して、その方向性を追求して行きたい。

このコロナ禍でこそ 気づく方向性

当財団の重要事業である「福祉住宅・福祉小規模集合住宅バリアフリー建築助成事業」を基にした実例集『ふれあい』（P19参照）は、前号でお伝えした通り、新型コロナウイルス感染下での取材困難により、昨年度は発行することが出来ませんでした。当誌担当として大変残念でしたが、しかし、こういう状況だからこそ、改めて今後の当誌の方向性を考えるいい機会となりました。コロナの影響で従来の生活

うか？西区のコミュニティFM三角山放送局と北翔大学が合同で主催するこのイベントでは、障がいのある人・無い人が集い、音楽やダンスなどのステージパフォーマンスや、絵画や工芸品などの作品発表をしながら、文字通りいっしょに楽しみます。

全国的に見ても貴重なこのイベントは年を追うごとに参加者・観客者共に増え続け、大いに盛り上がりを見せています。7回目となった昨年はコロナ感染への懸念がありましたが、最大限の対策のもと、いつもと変わらぬ笑いと感動いっっぱい、楽しい雰囲気いっっぱいの開催となりました。

このイベントには、さまざまな障がいのある皆さんも参加し、中には重度障がい者の人もいます。そんな方々をサポートしているある施設のスタッフから、意外とも思える言葉を聞きました。「コロナのせいで利用者さんは外出などの制限が生じていますけれど、日常生活はほぼ通常通りです」と言うのです。

障がいがある人たちのなかには日常的に感染症対策を徹底する必要がある人たちも多く、このたびのコロナ禍が始

まるずっと前から皆さんは万全の対策を講じていました。それはまさに、すべての人々に必要とされている基本的・日常的なノウハウなのです。

本稿執筆の一月末現在、あらゆる場所で感染防止策が講じられ、ワクチンに期待する声も大きいですが、個人的にはまだまだ予断を許さない状況が続くと予想しています。

その状況下、ただでさえ障がいがあるだけで社会生活の制限が多くなってしまおうという現実のなかで、感染症対策を講じながら日々の暮らしを営む障がい者が存在します。こういう時こそ、その方々のノウハウを広く提供してもらう機会なのではないか。同時にそれは障がい者への理解にもつながっていくのではないか。前述の施設スタッフの話から、私はそう確信するに至りました。

福祉の現場から生まれる ノウハウの普及を目指す

今回の「いっしょにね！文化祭」では、できうる限りの感染症対策を実施したのはもちろん、運営面ではネット配信を利用したこれまでに無い

試みもありました。そうしたハード面のバリアフリー化は、障がい者はもちろん、誰もが避けられない高齢化にも対応できる生活環境を創っていくという理想的な循環を垣間見る気がしました。

今年度、『ふれあい』の取材・発行が再開できるようにするために、こうした福祉現場で実践されている様々な取組みの中から、ウィズコロナ・アフターコロナ時代の安全安心住まいづくりのスタンダードとして生かせるヒントやアイデアを探り、提案して参りたいと考えています。

を変えざるを得なくなりましたが、今私は、福祉施設や関係者の日常的な取り組みから私たちの日常生活にも役立つヒントを探り出して行きたいと強く感じています。そう思い至ったのは、毎年参加している、ある障がい者イベントの関係者から聞いたひと言が、きっかけでした。

「私たちの日常は変わらない」 驚きの施設スタッフの言葉

毎年秋に札幌で開催される「いっしょにね！文化祭」というイベントをご存知でしょ



盛況だった「第7回いっしょにね！文化祭」。ネットでの参加者も

公益財団法人「ノーマライゼーション住宅財団」 の活動をご紹介します

小誌『WITH LIFE』を発行している当財団は平成元年設立、公益に資する法人として、「ノーマライゼーションの理念に基づき、高齢者や障がい者にとっても安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備・向上を通して、すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与する」ことを[目的]に、主なものとして下記の[事業]を行っています。

- 当財団では、活動理念・趣旨にご賛同いただける方へ、「賛助会員」の入会をお願いしております。
- 当財団へのお問合せは、本号2頁記載の連絡先へお願いいたします。
- 当財団の詳細につきましては、ホームページ (<http://normalize.or.jp/>) をご覧ください。

1 広報誌『WITH LIFE』 『共に生きる』発行

「生涯、快適に暮らしたい」をテーマに、ノーマライゼーションの理念と実践を紹介する当財団の広報誌です。ノーマライゼーションを実践されている方々による具体策、また、関連事例、関連情報源、福祉住宅の実例などの役立つ情報を紹介しています。



2 助成金により福祉住宅の 建築を支援

高齢者や障がい者にとっても安全で快適に暮らせる住宅、また将来身体機能が低下しても安心して生活できる住宅として新築したりリフォームした建築主、およびグループホームや高齢者向けアパートなどの福祉小規模集合住宅の建築主から応募を受け、審査のうえ今後の参考に資する施工物件に対し

て助成金を給付し、また特に優れた物件については設計施工業者さんを表彰させていただきます。

- 本年度の募集要項(概要)は左記の通りです。詳しくは当財団までお問合せください。
- 募集期間 5月1日～11月30日
- 応募方法 当財団ホームページから所定申請書をダウンロードして必要事項記入・提出
- 助成金 一件5万円～30万円 (総額300万円範囲内)

3 福祉住宅建築助成 実例集『ふれあい』発行

前項の助成対象物件の中から、さらに選考された事例を、写真や図面つきで紹介しています。専門家のアドバイスや、工夫した点、実際暮らしてみた感想なども綴られています。福祉住宅として新築・リフォームを考えている方などにお役立ていただいております。



4 小中学生による 「安全・快適アイデア」コンテスト

お年よりや障がいのある人が安心して快適に生活できるための、身近な道具・用具、また安全に外出を楽しむ環境づくりなど、様々な「安全・快適アイデア」を小中学生から絵と文字で提案してもらいます。

- 昨年度(第25回)入賞作品は本号16頁に掲載してあります。
- 本年度の募集要項(概要)は左記の通りです。詳しくは当財団までお問合せください。
- 募集期間 6月1日～10月31日
- 応募規格 画用紙(八つ切り)
- 応募方法 当財団ホームページから所定の応募票をダウンロードして必要事項を記入し、作品の裏面に添付

5 福祉事情に関する情報収集 及び提供

国内外各地の福祉施設や福祉事情などを視察し、小誌『WITH LIFE』でレポートを発表し、また「報告集」を発行しています。



●詳細は当財団へお問合せください。



生涯、快適に暮らしたい。